東北 VALUE SIGHT
山形

自身の子育て環境を見直し、山形県長井市に移住した佐藤氏。地域おこし協力隊として、長井市の特徴を生かしながら、ひとり親家庭の支援に精力的に取り組んでいる。

子育てと仕事の両立は、働く母親に限らず、今や社会的な課題のひとつとなっているが、ひとり親家庭においては深刻な問題であると佐藤氏は指摘する。

長井市地域おこし協力隊
佐藤　亜紀（さとう・あき）

1987年、神奈川県川崎市生まれ。
2007年オーストラリアの専門学校を卒業後、帰国。その後、さいわい鹿島田クリニックに入職。透析室にて医療事務兼クラークとして勤務。
2015年３月に退職し、家族で山形県長井市に移住。地域おこし協力隊として着任。同年４月に長井市ひとり親コミュニティ「あんじゅ会」を発足し、代表を務める。同年８月山形県子どもの貧困対策・ひとり親家庭自立促進推進委員会の委員に委嘱される。一男一女の母。

長井市ひとり親コミュニティホームページ
http://anjyukai.com/

みんなが笑顔　で寄りそえる子育てに最　高のまちへ

長井に移住したきっかけ

私は４月に長井市に移住したばかりの山形県初心者である。私の出身地の川崎は、都心へのアクセスもよく、駅前には何でもあり、暮らしに不便さを感じたことはなかった。しかし、祖母の田舎である山形の風景が忘れられず、訪れるたびに“帰ってきた”と思え心が和んだ。私の出身地の景色である都会のネオンを見てもそうは思えなかった。生まれた土地でもないのに懐かしく感じるのは、人は自然に生かされているという事を忘れないように、人間の本能がそう思わせてくれるのではないかと思う。

「いつか田舎に住みたい」という夢を抱いていたが、仕事と子育てで毎日が忙しく、そのまま夢で終わりそうだなと思っていた。そんな時、長女の保育園の迎えで先生に言われた一言がとても気になった。「今日は光化学スモック警報が出ていたので、お外遊びしませんでした」と。光化学スモック警報なんて川崎ではよく出るし、それまで気にも留めなかったが、その時はなぜかすごく気になった。帰ってからすぐパソコンを開き、いろいろ調べて数時間後にパソコンを閉じたとき、私の心は「田舎で子どもを育てよう」と決めていた。

さまざまな地域を調べたが、結局移住先に選んだのは祖母の田舎である山形だった。特に長井を訪れたときに飲んだ水道水のおいしさに感動した。長女の小学校入学に間に合うように手続きをし、運よく地域おこし協力隊として着任することができ、今は地域の方に支えられながら、子供たちと共に自然に寄り添い毎日おいしい空気を吸って生活している。

天然水100%の子育てライフ

長井は地下水が豊富で水道から流れる水がミネラルウォーターである。温度も一年を通して８℃ ～10℃なので夏は冷たく、冬は凍らないので消雪にも使われている。大手メーカーの製品でも硬度は30ほどだが、長井の水は硬度20以下という超軟水。おいしいといわれる水のほとんどが軟水で、体にも優しいという特徴を持つ、そんな天然水が蛇口から飲めるのだから、なんてぜいたくなことだろう。お風呂も食器を洗うのも天然水で行っているという事だ。私は今までサーバーの水しか飲んだことがなかったため、初めて長井の水道水を飲んだときは衝撃を受けた。今まで買って飲んでいたどの水よりおいしかったのだ。

胎児の体内水分量は約90%、幼児は約70%。その数字だけでも水が生きていく上でどれくらい大事か想像がつく。食育や木育に次ぎ水育という言葉を最近聞くようになったのも、水を意識するようになった人が増えている証拠ではないだろうか。

“あんじゅ会”の立ち上げ

地域おこし協力隊に着任してすぐ、地元の母子家庭の方から「同じ境遇の方が集まって悩みを話したりする場がない」という相談があり、私自身がひとり親という事から相談に乗ることになった。

そこで、ひとり親の方が気軽に悩み相談や仲間作りができる場を提供したり、情報を発信していこうと思い、コミュニティ「虹のわ会（現在、あんじゅ会に変更された）」を作って、ランチ会を開催した。

私の本来のミッションは長井が誇る地域循環型農業のレインボープランによる地域おこし活動だったため、同じ地域おこし協力隊の仲間にレインボープランの野菜を使った料理を作ってもらい、事務局の方に食育の話をしていただくとともに、行政の相談もできるようにと子育て推進課長にも来ていただき、さらに、子供が楽しめるようにバルーンアートパフォーマーにもお越しいただいた。

山形新聞でも取り上げてもらい、内容はとても充実したものだったが、残念ながら参加人数は少なかった。現在は会員数20名ほどで、ランチ会も回数を重ねるごとに参加人数は増えているものの、聞くと土地柄なのか大々的に“ひとり親”と宣伝したのが逆効果だったようだ。今は会員のみに宣伝し会員限定で集まっている。

ひとり親家庭と子どもの貧困

個々にさまざまな悩みを抱えているが、母子家庭の多くが貧困状態にあり、家計に余裕がない家庭の子供たちの多くは十分な教育を受ける機会を失い、進学をあきらめている。親の収入格差が子供の教育格差となり、ひいては子供の収入格差、社会的格差にまでつながってしまい、世代間での貧困の連鎖が起きている。

ひとり親の方の声をいくつかあげると、「子供が熱を出した時の預け先がなく、なかなか採用されない」「子供の急病で急に休むことがあり、会社で信頼されず正社員になれない」「子供が熱を出した時に有休を使えるように自分が体調を崩しても使わず這ってでも出勤する」「子供が熱を出したからと急に休めば、これだから女性は信頼できないと思わせてしまい昇格できないばかりか解雇の対象にされる。実際に解雇された友人がいる」「子供が熱を出して初めに思ったのが“会社を休まなきゃ。困るな”だった。私はひどい母親だと思った。かわいそうじゃなくて困ると思うなんて」などがある。

あやめ公園内にある湧水（左写真）
あんじゅ会イメージ図（あんじゅ会ＨＰ参照）（右写真）

病児保育の充実を

子どもの貧困の原因の一つに病児保育の不足が上げられると思う。

子供が熱を出すのは当たり前で、子どもを看病するのも親として当たり前で、当たり前のことをして解雇される社会なんて絶対におかしい。ひとり親に限らず働くお母さん達の悲痛の叫びだが、特にひとり親の安定した収入と経済的な自立は、子供が急病になったときに頼れる“心のゆとり（病児保育）”なくして実現しないのではないか。もちろん子供の貧困問題は病児保育のみが原因ではなくさまざまな問題が絡み合っていて一朝一夕には解決しないが、目の前の問題からひとつずつ取り組んでいきたい。

お母さんが幸せだと子供も幸せ＝地域の未来も明るくなると信じている。

長井市のひとり親コミュニティ
あんじゅ会